秀吉に蹴散らされた「行人の末裔」

増山雄三

室町末期から豊臣期初期までの間、村は自営していたが、裕福な村へ行くと、村そのものを要害化して、その周りには堀を巡らせるが、村の入口を大手と呼び、裏の出口と搦手といい、中央には一向宗の寺を城郭の様にそそり立て、城楼のように太鼓楼を、高々と上げている村が、今でも幾つか残っている。

それで、戦国期を含めた室町時代というのは、単に乱世という捉え方だけでは、どうにもおさまらないほどに、経済的にも文化的にもまた社会的にも、日本史におけるその前後の時代にはない、活力と豊満さに富んだ時代だった、という事が分る。

また、畿内の富裕な先進地帯では、地方のブロック的な統一を目指す、英雄の出現を嫌い、ましてや、天下統一というのは、思想そ

のものが、彼らの敵だったので、彼らは連合して、その動きを妨害し、加賀一向一揆がそうであり、紀州の雑賀や根来に至っては大名を作らず、地侍の連合で行政やっていた。

それでも、それを崩して統一に向かったのは、鉄砲の出現で、もしそれがあと百年遅れたら、ヨーロッパに似た、市民意識が出来上がったかもしれないが、そんな事もあって、紀州の「根来寺」へ行くことにした。

それでも、この根来寺は秀吉の塔一事業の初期に、攻め潰されて今はもう、叢に礎石だけ残っている、としか思っていなかったので、番号を調べ電話してみると、根来寺は今でもありますと、無愛想な声音で、なにか僧兵がいうような感じで答えてくれた。

戦国の根来衆については、永禄二年（一五五九年）に来日した、耶蘇会士のガスパル・ヴィルラが、根来衆の存在を書案に残しているが、その頃、秀吉が信長に仕えて早々で、ヴィらが滞在した堺は、貿易機構であると共

に、銃などの兵器の生産地でもあり、それを通じ、根来衆とも密接な関係にあった。

それで、根来寺の開基は、平安末期の密教僧の「覚鑁」によるが、彼は浄土教を密教に取り入れたので、高野山はこの人物を嫌い、根来の山中に移り住んだのである。

このため覚鑁は追われて、同じ紀州ながら、

以後、根来寺は、彼の新義真言宗の本拠になり、覚鑁自身の生涯は、高野山の衆徒からの、圧迫のために不遇だったが、彼の死後、浄土教の流行という、時代の風潮もあって、根来手は大いに栄え、貴族や豪族から土地の寄進を受けて、次第に寺領を大きくした。

それで、戦国も天文年間になると十万石程度になり、この寺に集まった僧兵のような根来衆行人の数は二万人を越え、全国各地を駆け回っていて、また兵力の動員能力からみれば、優に寺そのものが、大諸侯並みだった。

このような時代に、富裕になった領域が、領主の支配を好まなくなり、村々が自営し他

村と繋がりを深めるために、「一向宗」が出現してヨコに結び目を作り、その最大な結び目が、大坂石山本願寺だが、のち、織田信長と対抗し、根来衆は紀州の雑賀衆と同盟して信長に対し、彼が死ぬまで勝ったのである。

そんな根来衆は、紀ノ川沿いにある地主たちが、一族を根来寺に住まわせ、行人組織の幹部にならせ、村落を自営していたが、一向宗で紐帯を作る代わりに、「根来同盟：とも」というべき、自衛組織があったのは、一向宗における自営的供養と、ほぼ変りはない。

それでも、根来の行人たちは、常時は寺にいるのでなく、その半数は諸国を歩いて、時には、加持祈祷などをして報酬を貰い、仲間同士で受け持ちを決めて旅をして、先輩から酒と女の自慢話を聞いて、それを羨ましく思い、自分もそうしたいと思ったに違いない。

それで、天正十三年（一五八五年）三月、秀吉は不意打ちに大軍を南下させた時、根来衆は果敢な行動をとり、今の岸和田城や貝塚

城に防禦線を作って籠ったものの、秀吉はこれら根来衆の城壁を包囲し、山伝いに根来寺に迫り、不意に襲ったのである。

それでも、根来寺の根来衆は、僅かしかいなかったので、秀吉はこれを襲い、僅か一日で陥落させ火を放ったため、二千七百余の堂塔が燃え、大塔と大伝法堂と太師堂を残したのみになり、生き残った根来衆は四散した。

かくして、根来衆は秀吉により壊滅されてしまい、根来衆の実態はよく分らなくなっているが、「根来」という名前はわりとあり、それは、根来衆が四散してから、先祖が家系伝説に従って、当時を懐かしんで根来姓にしのだろうが、私の大学のKラスメートにも、根来雄一という名前の人物がいた。

まあそれはそれとして、翌日、再び根来寺へ行くと、無人だったので、大塔の方へ回ると、塔の入口が番小屋になっていて、例の偉丈夫が横になっていたか、気配感じて出てきたので、官香料を払うと、草履を突っかけて

きて、案内をしてくれた。

それで、塔の縁をまわるうちに、扉を撃ちぬいて大穴をあけているなど、あちこちに、直径六、七(チセン)の弾痕がある事に気がついた時に、彼は「**あのときの弾痕です**」といい、恐らくそれは、塔のすぐ側で撃ったのでしょうといったあと、大伝法堂を見せてくれ、この人からお茶の接待をうけた。

彼は、**和田**さんといい、年齢は六十三才というが、そのようには見えぬほど若々しく、五十才までは寺とは全く無縁で、港湾関係の検査の仕事などをし、彼の表現では、「六十の時にこの寺に迷い込んできて、使って貰っているのです」という事だった。

それで、境内は隅々まで綺麗に掃き清められているが、この十四万坪の境内を、一人で掃除するのだというが、ここの警戒も一人でやると言い、たまたまボクサー犬が迷い込んできて、彼に懐いてしまったので、そのボクサーと一緒に山内を警戒して歩くという。

それで彼は、どうやら酒が好きなようで、頸筋が赤くなっていたが、彼はその頸をゆっくり撫でて、「わしら、婆婆にいたらろくなことをせん」といって苦笑いし、いまの生活が自分〇〇にとって、この上ないものであるといって、溜まっていた唾液を、ひょいと吐くような、さりげなさでいった。

それで私は、「お生まれはどこですか」と聞くと、「紀州です」といって立ち上がり、今から本堂の須弥壇のカラ拭きをするのだというその姿は、なまじっか、京都や奈良の俗人風の僧侶よりも、余程そこにいる息使いというものが、確かなようであった。

それで、そうした彼の立ち振る舞いを見ていると、それはまさに、天正十三年三月に、秀吉に蹴散らされた「行人の末裔」が、ただ一人だけ生き残って、残されていた堂塔を、しっかりと守っているのではないか、と思ったりしたが、あるいはそうかもしれない。

令和四年十月